亀井俊介

わが妻の「死の美学」

わが妻の「死の美学」

亀井俊介

リバティ書房

亀　井　俊　介(かめい・しゅんすけ)

1933年、岐阜県に生まれる。
55年、東京大学文学部英文科を卒業。
大学院で比較文学を専攻。
現在、東京大学教授。
アメリカ文学からアメリカ大衆文化にいたるまで広い範囲で著述活動を行なっている。
69年、『近代文学におけるホイットマンの運命』で日本学士院賞を受賞、77年、『サーカスが来た』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞している。『アメリカのイヴたち』『ピューリタンの末裔たち』『マリリン・モンロー』『「金メッキ時代」への私的考察』『現代の風景』など著書多数。また、著作集「亀井俊介の仕事」(全5巻)を刊行中。

視覚障害者その他活字のままではこの本を利用できない人のために、著者、出版社の承諾なく録音図書および拡大写本の製作をすることを認めます。但し、営利を目的とする場合は除きます。

わが妻の「死の美学」　　© 1993

1993年2月10日　第1刷発行
1993年4月10日　第3刷発行
定価はカバーに表示してあります

著　者　亀　井　俊　介
発行者　後　藤　利　広
発行所　株式会社リバティ書房
東京都新宿区神楽坂4-1-1
オザワビル3F
電話 (03)3267-2897
編集室　名古屋市中区栄1丁目23-20
電話 (052)202-0841
企画・編集・製作協力　株式会社エヌピー企画、株式会社素朴社、有限会社夏目書房

※落丁・乱丁本はおとりかえいたします。
Printed in Japan　　ISBN4-947629-45-2　C0095

わが妻の「死の美学」

わが妻の「死の美学」・目次

序　章　妻の死をめぐる思い　5
第一章　入院―家族の混乱　21
第二章　化学治療―希望の力　36
第三章　ガン告知―死の美学　57
第四章　「普通の生活」―死の準備　67
第五章　墓と葬儀―シンプル主義の計画　82
第六章　望ましい死―尊厳死を求めて　103
第七章　死の圧力―心の混乱　112

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第八章　死の床――タイム・スリップに陥って　128
第九章　もう一度考える――「ガン告知」と「尊厳死」　143
第十章　死にゆく人の生の意味　165
結　び　それぞれの決意　179
付録・告別式ご挨拶　184
墓をめぐって　189
仏像さがし　194
「書棚戦争」の思い出　198
対談・生と死のはざまで　205
佐々木常雄（都立駒込病院化学療法科部長）
亀井俊介
あとがき　219

装幀　東　幸見

序章――妻の死をめぐる思い――

私の妻は、いまから二年前に亡くなった。その一年前に、彼女は肝臓ガンの末期で、もはや助からない体であることが判明した。最初、私たちは妻にその事実を伏せていたけれども、彼女自身の厳しい要求があって、ついにいわゆる「ガン告知」をした。それから、妻の死との闘いがはじまった。私たちは懸命に妻を応援したつもりだが、ほんとうのところは何の役にも立たなかったに違いない。

病気そのものとの闘いは、医師と医術に頼らざるをえない。私たちは、現代の医学を百パーセント信用しているわけではない。そもそも、妻の肝臓ガンがなぜその段階になるまで発見されなかったのか。妻は十五年前に乳ガンを患っており、そのため体のことにはい

つも気を配って、勤務先の健康診断のほか、人間ドックでの検査もくり返していた。さらに、ほぼ半年ほど前からひどい疲労をおぼえだし、三ヵ月前にはかなりの下血を見たため、何度も病院へいって診察を受けていた。それでも肝臓ガンとはわからなかった。医学にも何か盲点があるのではないか。

だから医学を百パーセントは信用せず、むしろその限界を強く意識しているのだが、この種の病気に最も有効に対応しているのはやはり医師と医術ではないか、と私たちは最終的に結論した。無言のうちにではなく、妻と私とは話し合ってそう決断し、担当医師にすべてをまかせることにした。何人かの知人たちが、妻の長びく病気を心配し（なかにはひそかにガンと推測した人たちもいたに違いない）、「名医」「名薬」から民間の信仰治療のようなものまで、いろいろと紹介してくれたけれども、すべて耳をかさず。ご辞退申し上げた。

だが、病気との闘いのほかに、確実に迫ってくる死との精神的な闘いがあった。これには、医師も医術も、対応する力はさらに限られている。妻の病気の事実を知るごく少数の家族の者は、その闘いに全力をあげて参加したつもりだが、むしろ死の力の前にたじろぎ、おろおろし、浮き足だつ心をおさえるのが精一杯だった。

妻はこの闘いに、だまってひとり立ち向かっていったように思う。肉体的には、負ける

ことがはじめからわかっている闘いだった。妻はつとめて平然と死を迎え、精神的にこれに勝つことを決意したようだ。

「普通の生活をしましょうよ」と彼女はいった。

そしてその間に、死への準備を整えていった。自分の闘いが決して目立つことなく、まったく平凡のうちに終始し、他人に迷惑をかけることは極力さけて、つつましく自然な死を迎えることに全力をあげたといえる。

私は彼女のその最後の「生」を「闘い」と呼んだが、妻はたいていいつも通りにおだやかな微笑を浮かべて生活していた。電話で話し合った妻の友人たちは、彼女の元気な話し方のため、深刻な病気という思いを消し去っていたようだ。

こんなことをいっても、妻を素晴らしい英雄的な生き方をした人などと、私は思っているのではない。いや、ほんとうはそういう思いもひそかにあるのだが、「平凡のうちに終始」するのが、彼女の身上だった。死を恐れる気持ちはもちろんあったに違いない。精神的な緊張が続き、逆に体力は衰弱してくるにつれて、神経の混乱や、それこそ「病的」な思考と行動を見せることもあった。私は狼狽した。しかし、また、そういうことにむしろ彼女の「人間」らしさを感じもした。いまからふりかえると、彼女の「弱さ」をいとおしく思う気持ちはいっそう強い。弱さの時がすぎると、彼女はまた死と闘う人になっていた。

妻が亡くなってしばらくの間、私は「ガン告知」をしたことの正しさを、ほとんど絶対的に信じようとしていた。ずいぶん迷ったあげくの告知だった。しかしそれがあって、彼女は死への準備を決意し、見事にやってのけたように思える。妻と私は、「尊厳死」のこともよく話し合った。その実現に最善をつくそうと誓い合い、私は彼女が普通の人間に可能な限り、それを実現したようにも思う。「ガン告知」がなければ、そんな努力も意識的にはしなかった。あるいは中途半端に終わったのではないだろうか。

ところで、妻の死後、わずか四ヵ月たらずして、妻の母が亡くなった。妻の両親と私たちとは、二十数年間、一緒に暮らしてきた。だが妻の父は数年前に亡くなり、私たちの一人息子は結婚して家を出たので、妻の母は私たち夫婦と一家をなしていた。妻には姉が三人、妹が一人いるが、母は私の妻をいちばん信頼していたのではないだろうか。私たちは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三人で仲よく暮してきたといえるように思う。

ただし、母は頑健な体の人だが、九十歳の老齢である。しかもこんどの妻の入院の三年ほど前、やはり乳ガンとわかって手術していた。（ついでにいえば、たぶんガンの家系なのだろう、妻のすぐ上の姉も母と前後して乳ガンの手術をした。）そんなこともあって、私たちはこの母にショックを与えることを恐れ、妻の病名を伏せていた。それで母は妻の回復に希望をもち続けていたのだが、思いもかけない死に会って、すっかり気力をなくしてしまったようだった。妻の話になるとただ涙するばかりだった。そしてちょっと風邪をひいたのがきっかけで、娘を追うようにぽっくり逝ってしまったのである。

それから三ヵ月余りして、こんどは私自身の母が亡くなった。父は十年ほど前に死んでいる。母は私の郷里の岐阜県の山間の町に兄一家と住み、米寿の祝いをすませたが、寄る年波に勝てず、床に伏していることが多かった。しかし私の妻の死を、私のために最も悲しんでくれたのはこの母だろう。電話で話しても、直接会っても、しっかり妻の供養をすること、そして何とか堪えて生きることを説くのだが、たいてい涙にむせて言葉にならなかった。

その母が、階段から落ちて大ケガをした。急いでかけつけた時には、よく来てくれた、お前自身はどうしているかなどと受け答えしたのだが、一週間後には、息を引き取ってし

まった。

心落ちついたら妻の病気と死の経過についてじっくり話し合い、なぐさめ合いもしたいと思っていた二人の母をあっという間に失って、私の喪失感はつのるばかりだった。

それからもうひとつ味わったのは、時間とともに淋しさも薄らいでいくだろうと、いろんな人もいってくれ、私も信じようとしていたことが、必ずしも事実ではないという思いである。妻の闘病中や、死後のさまざまな行事をしている間は、私自身、張りつめていた。緊張し、興奮してもいた。しかし一人残され、しかもある種の落ち着きを得、たとえば家の中にぽつんと寝そべっていたりすると、妻の生と死を考える気持ちは深まり、ひろがりゆくばかりなのである。

自分の孤独を感じる時、妻の最後の一年間が、じつはもっとはるかにすさまじい孤独だったに違いないという思いも生じてくる。そしてくり返し私を襲うのは、あの「ガン告知」がほんとうに正しかったのだろうかという疑念である。「ガン告知」によって、私は妻の生への希望を断ち切ってしまった。もちろん、なおも希望をもとうと私は話し、妻もそう、

そのつもりですといいきった。しかし、彼女もひとり寝ている時、いや私やほかの人がそばにいても、死の想いは彼女をおおいつくし、底知れぬ闇でつつみこんでしまったはずだ。絶望的な闘いに彼女を追い込んだのは、結局、あの「ガン告知」ではなかったのか。

「ガン告知」がなくても、妻が自分のガンを強く疑っていたことは確かだ。だからこそ事実を教えてほしいと迫ってきた。私が事実を隠し通せば、彼女は疑いを深めるばかりで、それもまた不幸であったに違いない。しかし断固として、末期的なガンであることを否定してやれば、彼女も心のどこかでそれを信じようとし、あのような死への準備ははじめなかったかもしれない。あんなに張りつめた精神的な緊張もなく、ただ肉体的な衰弱にまかせて生きていけたかもしれない。少なくとも、死との孤独で絶望的な闘いをしなくてすんだかもしれないような気がする。

「ガン告知」をしたことについて自信がなくなり、死にいたるまでの妻の心の状況について思いを深めていくにつれて、「尊厳死」とはいったい何だろうか、という疑念にも私は襲われるようになった。たまたま妻の闘病の時期に、世間でも「尊厳死」が話題になりはじめ、ジャーナリズムはさかんに書きたてた。それも単純しごくに美化してもてはやすような論調だ。しかし人間がどんなに頑張り、「尊厳」をもって「死」を迎えようとしても、人間の力には限界があるのではないか。神経が混乱し、意識が混濁し、肉体が生きているう

ちから崩壊していくのをみずからさとっても、それが自然のプロセスであるならば、堪える以外には仕様がない。「尊厳」とは違う様相が否応なく人間にもたらされることもあるのではないか。

逆に、「尊厳死」などということを考えたこともなかったに違いない私の二人の母は、ほとんど何らの崩壊症状を見せることもなく、あっという間に亡くなった。いわば「尊厳」を保ったまま、「死」に迎えられた。「死」は、人間の努力と関係なく、勝手にふるまっているようにも思える。

妻が亡くなってから二年間、私は彼女の最後の一年をふり返り続けてきた。さまざまな思いがつきまとう。自分を慰めたくて、なすべきことはなしたという感情に駆られることもあれば、自分の情けなさに胸しめつけられることもある。

しかし最終的に最も強く私に迫ってくるのは、あらゆる時に示された妻の姿、行動、そして思考である。結局、彼女自身が最後の生き方を選択した。彼女は「死の美学」とでもいうべきものを打ちたてた。もちろん、そんなことを口にはせず、また自覚もしていなかったと思う。しかし、いかに美しく死ぬかということの方向を見定め、死が刻々とせまってくる毎日の日常生活の中でそれを実行することに全力をあげ、死んでいった。いわば彼女は、自分の「死の美学」に殉じた。そう思うと、最終段階での混乱や崩壊の時も、逆に

美しい光芒を放って見える。その「死の美学」の強烈さの前には、私を含めた周囲の者の応援も、反省も、まるでみみっちい、問題にもならぬものであったような気がしてくる。

私はこの本で、こういう妻の生から死への一年間のありさまを、もっと具体的につづってみたいと思う。妻は大学教授をしていた。まじめな研究者で、真剣な教育者だったと、彼女を知るたいていの人は認めて下さるように思う。しかし世間的に名を知られるような活動をしていたわけではない。ましてや、スポーツ選手やタレントさんのように、世間の関心を引く存在ではまったくなかった。大部分の読者には、どうでもよい無縁の人である。すでに述べたように、彼女自身、平凡さを愛し、「普通の生活」を重んじていた。

そんな女性のことをつづるのは、ひとつには私の個人的な思いからである。だがそれ以上に、私は彼女の闘病生活を軸にして、人間の生と死をめぐるいくつかの問題を考えてみたいのだ。妻が華やかさのぜんぜんない存在であったことは、かえって、多くの人に共通する問題をなげかけることになるかとも思う。

ここで、妻の経歴をざっと述べておくことが、何かと便利であろう。幸い彼女の死後一周年にあたり、大学での同僚の人たちが、『ヴィクトリア朝の小説』と題する彼女の論文集とともに、『亀井規子先生をしのんで』という追悼文集を出して下さった。後者には略年譜ものせられている。それを参照しながら、これからの記述に関係しそうな部分を補って、簡単に記してみよう。

私の妻、亀井規子（のりこ）は、一九三二年、東京に生まれた。父の山名寿三は法律学者で、日本大学の教授をしていた。娘の名前の付け方は、その職業が反映していると思う。規子は日本女子大学英文学科で学び、一九五四年に卒業、東京大学大学院に入って、比較文学という学問を専攻した。私自身は東大の英文科を卒業して、大学院で同じ専攻課程に進んだので、彼女と知り合った。同じ年齢だが、彼女の方が半年ほど「先輩」になる。

一九五九年、規子はアメリカのオハイオ州立マイアミ大学大学院に留学した。英文学をもっと学びたいとの思いだった。私は米文学を学びたくて、ミズーリ州セント・ルイス市の私立ワシントン大学大学院に留学した。規子は郵船会社に勤める一番上の姉の夫の計らいで、当時、飛行機よりずっと料金の安い貨物船で太平洋を渡ったが、私も同じ船でいけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com